

土坑12 (図38 図版9-5)

調査地中央部西側M7グリッド、標高59.0～59.1mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。平面形態は長軸3.2m、短軸1.8mを測る不整形である。東側はテラス状の段を持ち、検出面から底面までの深さは40cmである。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑13 (図38 図版9-6)

調査地中央部西側N6グリッド、標高59.9～60.0mの緩斜面上に位置する。Ⅱ層下、Ⅲ層上面で検出した。平面形態は、長軸1.4m、短軸1.1mの不整な楕円形である。底面は径0.4mの円形を呈すると思われる、検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は基盤層ブロックの混じる明褐色土を主体として堆積している。縦47cm、横40cm、幅10cm、重さ25.0kgの平石が、立った状態で出土した。人為的な所作による可能性があるが、他に出土遺物はなく、遺構の性格や時期は不明である。

(木山)

土坑14・15 (図39 図版10-1・2・3)

調査地中央部東側N5グリッド、標高60.3～60.5mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。土坑14・15は重複しており、土坑15が土坑14を掘り込み、土坑15は土坑14に後出する。土坑14は、平面形態は長軸2.0m、短軸1.4mの不整形、西側に1段テラスをもち、中心よりやや北東部を最深部として、レンズ状にくぼむ。検出面から底面までの深さは60cmである。埋土は炭が混じる暗灰黄色土を主体として堆積し、上層では基盤層ブロックが混じる。出土遺物はない。土坑15は、平面形態は径0.7mの不整な円形、底面は長軸0.5m、短軸0.4mの不整形の楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は焼土と炭を含んだ褐色土が堆積し、中央付近で底部から少し浮いた状態で炭化材が出土した。土器片が出土したものの残存状況が不良なため、遺構の時期は比定できなかった。

(木山)

土坑16 (図40 図版10-4)

調査地中央部西側K8グリッド、標高57.9mの緩斜面上に位置する。Ⅰ層下、Ⅴ層上面で検出した。平面形態は、長軸1.8m、短軸1.5mの不整な隅丸方形を呈する。底面は長軸1.1m、短軸1.0mの隅丸方形で比較的平坦である。検出面から底面までの深さは40cmである。埋土は全体的に炭化物、焼土を含み、特に底面に炭化物・焼土を多量に包含する層(Ⅰ層)がある。南・北・東壁面と底面は被熱しており、焼土塊が認められた。炭化物層(Ⅰ層)には根が入りこみ、攪乱を受けている。遺物は埋土中から弥生時代終末期の土器片と黒曜石の剥片が出土しているが、流入の可能性が高く、遺構の時期は特定できない。本遺構は諸特徴から、製炭土坑であろう。

(木山)

土坑17 (図40 図版10-5)

調査地中央部北西側H8グリッド、標高55.7mの緩斜面上に位置する。表土下、Ⅴ層上面で検出した。中央部がトレンチで切られている。平面形態は、長軸1.7m、短軸1.3mの不整な楕円形で、底面は長軸1.1m、短軸1.0mのいびつな隅丸方形を呈する。検出面から底面までの深さは50cmである。埋土は全体的に炭塊を含んでおり、根による攪乱を強く受ける。底部に炭化物を多量に含む層(⑧・⑨層)が堆積し、東・西壁面には被熱痕跡が認められた。底部より直径3.5cm、長さ10cm程度の炭化

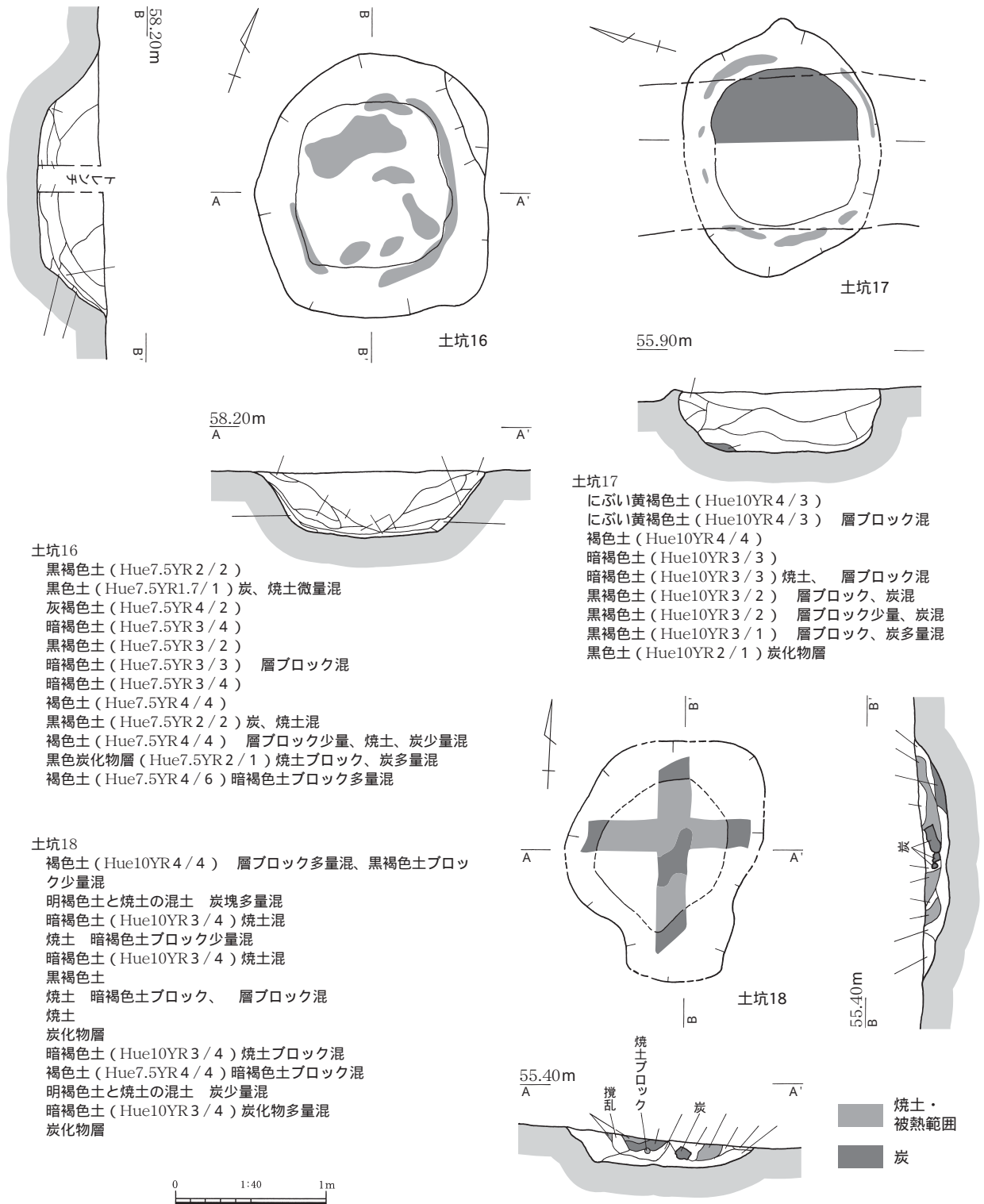


図40 土坑16・17・18

物が多数出土したが、他に出土遺物は認められず、遺構の時期は不明である。本遺構は諸特徴から、製炭土坑と考えられる。

(木山)

土坑18 (図40 図版10-6)

調査地北東部側F6グリッド、標高55.1mの緩斜面上に位置する。表土下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.6m、短軸1.3mの不整な楕円形状を呈する。断面は緩やかに立ち上がり、底面は

長軸0.8mのいびつな楕円形で、検出面から底面までの深さは30cmである。埋土は全体的に炭と焼土を多量に含み、土坑中央の埋土上層に焼土塊が広がり、下層に炭化物を多く含む層（⑬・⑭層）が堆積している。土器等の出土遺物はなく遺構の時期は不明であるが、南側の凸部は焚口と考えられ、製炭土坑であろう。

(木山)

遺構外出土石器（図41・42 図版15-2）

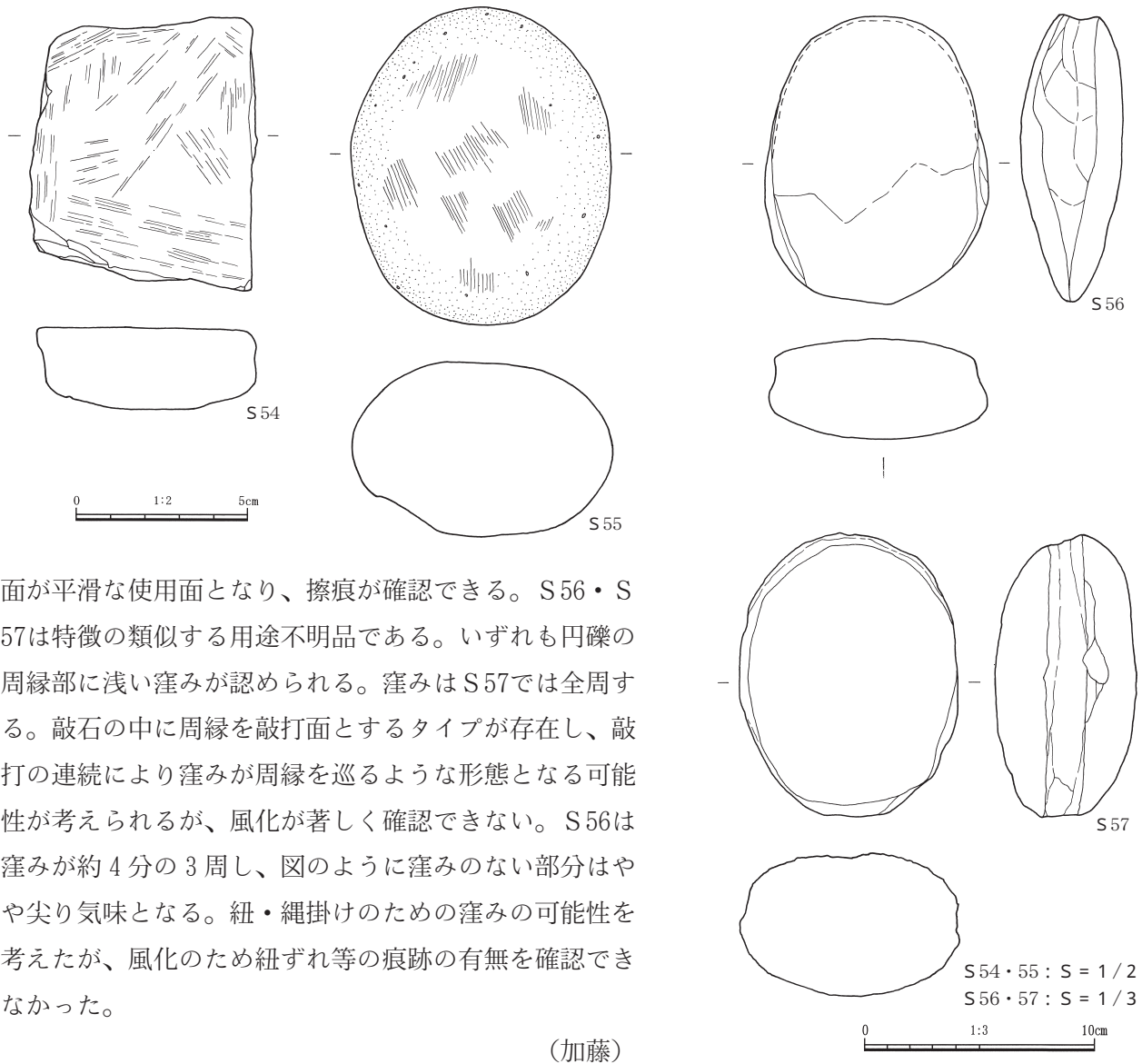
本項では用途不明の石器を含め、12点を図示した。

S46～S53は石錘である。いずれも円礫を使用し、S46～S52は長軸両端を打ち欠く打欠石錘である。S53は切目石錘に該当すると思われ、長軸両端の打ち欠きに加え、切り込みを入れている。本遺跡出土の石錘の重量は66.5g～143gで、200gを超える大型のものは出土していない。

S54は砥石で長石斑岩の角礫を用いており、片面に平滑面が認められる。S55は磨石で、円礫の片



図41 遺構外出土石器（1）



面が平滑な使用面となり、擦痕が確認できる。S56・S57は特徴の類似する用途不明品である。いずれも円礫の周縁部に浅い窪みが認められる。窪みはS57では全周する。敲石の中に周縁を敲打面とするタイプが存在し、敲打の連続により窪みが周縁を巡るような形態となる可能性が考えられるが、風化が著しく確認できない。S56は窪みが約4分の3周し、図のように窪みのない部分はやや尖り気味となる。紐・縄掛けのための窪みの可能性を考えたが、風化のため紐ずれ等の痕跡の有無を確認できなかった。

(加藤)

図42 遺構外出土石器（2）

遺物番号	挿図番号	地区 地層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S46	41	I 10 表土下	石錘	安山岩	5.3	4.95	1.85	66.5	円礫長軸の両端打欠
S47	41	H 9 表土中	石錘	安山岩	3.95	3.55	1.6	32.4	円礫長軸の両端打欠
S48	41	G 7 V層上面	石錘	安山岩	6.15	4.9	2.1	92.0	円礫長軸の両端打欠
S49	41	F 10 表土下	石錘	安山岩	4.6	4.5	1.5	35.0	円礫長軸の両端打欠
S50	41	I 9 表土下	石錘	安山岩	6.2	6.6	1.9	91.5	円礫長軸の両端打欠
S51	41	R 3 I層	石錘	安山岩	6.5	5.1	2.15	94.5	円礫長軸の両端打欠
S52	41	F 8 表土下	石錘	安山岩	7.7	6.1	2.2	143.0	円礫長軸の両端打欠
S53	41	G 7 表土下	石錘	角閃石安山岩	6.6	4.1	2.6	94.0	円礫長軸の両端打欠・切込
S54	42	I 9 表土下	砥石	長石斑岩	7.9	6.7	2.5	209.0	
S55	42	F 8 表土下	磨石	安山岩	9.3	7.6	5.1	480.0	
S56	42	J 9 表土下	不明	安山岩	12.7	9.9	4.5	536.0	
S57	42	L 7 I層	不明	粗粒安山岩	12.5	9.7	6.3	849.0	

第4章 特論

1. 名和中畝遺跡出土土器胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

分析の目的

名和中畝遺跡から出土した弥生時代終末、古墳時代後期の土器のあいだで時期が異なれば胎土がどうなるか検討した。また、古墳時代後期の土師器、須恵器、移動式竈と名和飛田遺跡の同時期の土器と比較し、胎土が類似しているかどうか調べた。

分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK(カリウム)、Ca(カルシウム)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、下表に示した弥生時代10点、古墳時代10点の合計20点である。

蛍光X線分析法による分析結果

図43 K-Ca、図44 Sr-Rbの散布図では、遺跡内での時期ごとに胎土に違いがあるかどうか検討した。すると弥生時代終末期の土器が3つにわかれた。それは、1・4と7・10と2・3・5・6・8・9である。また古墳時代後期の土師器も2つにわかれた。それは、14と12・13・15で、須恵器は1つに

名和中畝遺跡出土土器分析値一覧表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料番号	出土遺構	層位	種別	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時期
1	竪穴住居1	㊟層上面	弥生土器	60.48	1.07	25.55	5.19	0.07	2.09	1.22	3.26	0.80	0.08	67	404	333	弥生終末期?
2	竪穴住居1	㊟層上面	弥生土器	65.64	0.99	19.73	6.06	0.06	1.98	0.67	2.76	1.76	0.13	203	250	354	弥生終末期?
3	竪穴住居1	㊟層上面	弥生土器	66.24	1.06	20.34	6.34	0.07	1.69	0.72	1.61	1.66	0.08	198	276	373	弥生終末期?
4	竪穴住居2	床直	弥生土器	63.95	1.08	23.02	4.73	0.05	1.89	1.58	2.27	1.14	0.09	163	493	348	弥生終末期
5	竪穴住居2	㊟層上面	弥生土器	65.55	1.08	20.81	6.65	0.07	1.95	0.55	1.06	1.93	0.05	235	193	336	弥生終末期
6	竪穴住居2	床直	弥生土器 甕	64.92	1.10	20.94	6.42	0.07	1.82	0.63	1.92	1.90	0.06	196	197	416	弥生終末期
7	竪穴住居2	床直	弥生土器 甕	66.55	1.01	19.23	5.34	0.07	1.89	1.30	2.38	1.93	0.08	256	424	333	弥生終末期
8	竪穴住居3	床直	弥生土器 器台	66.95	1.12	20.27	3.99	0.03	1.79	0.65	2.96	1.94	0.12	190	281	319	弥生終末期
9	竪穴住居3	㊟層	弥生土器 甕	64.21	0.99	22.07	5.00	0.06	1.89	0.80	3.14	1.58	0.09	201	295	336	弥生終末期
10	竪穴住居3	床直	弥生土器 壺	66.46	1.16	19.64	4.74	0.05	1.88	1.29	2.02	2.43	0.12	258	423	291	弥生終末期
11	竪穴住居4	床直	移動式竈	64.34	0.92	19.93	5.89	0.08	2.10	1.34	3.22	1.85	0.13	174	435	263	古墳時代後期
12	竪穴住居4	床直	土師器 甕	65.99	1.16	20.92	6.10	0.07	1.96	1.10	0.52	1.82	0.08	223	327	428	古墳時代後期
13	竪穴住居4	床直	土師器 甕	63.47	1.15	21.16	5.66	0.07	2.12	0.96	3.33	1.74	0.14	212	317	304	古墳時代後期
14	竪穴住居4	床直	土師器 甕	63.66	1.05	22.60	4.72	0.06	2.03	1.80	2.67	1.10	0.11	102	533	284	古墳時代後期
15	竪穴住居4	床直	土師器 甕	64.61	1.03	20.87	5.49	0.06	2.03	1.10	2.67	1.84	0.08	208	371	344	古墳時代後期
16	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	68.72	0.88	18.32	4.76	0.05	2.01	0.40	2.89	1.66	0.11	179	126	358	古墳時代後期
17	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	71.04	0.81	17.56	3.39	0.03	1.76	0.39	2.78	1.82	0.17	178	133	324	古墳時代後期
18	竪穴住居4	床直	須恵器 坏身	69.35	0.83	18.60	3.80	0.04	1.97	0.35	2.96	1.73	0.16	198	127	311	古墳時代後期
19	竪穴住居4	床直	須恵器 坏蓋	71.32	0.90	16.78	4.34	0.04	1.72	0.31	2.34	1.82	0.22	235	128	387	古墳時代後期
20	竪穴住居4	床直	須恵器 甕	67.51	1.45	18.62	5.81	0.08	2.00	0.32	2.39	1.43	0.14	166	143	536	古墳時代後期

まとまった。

図45 K-Ca、図46 Sr-Rbの散布図では、古墳時代後期の時期に限定して名和飛田遺跡と比較し、胎土に違いがあるか検討した。その結果、両遺跡とも土師器と須恵器で胎土に違いがみられ、識別できた。また、移動式竈も土師器の分布域に入った。なお、名和中畝遺跡の14のみが単独で分布した。

実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。

弥生時代終末期および古墳時代後期の土器には3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石と3mm以下の安山岩が含まれていた。14の土師器は他の土器に比べ、石英などの砂粒が少なく角閃石が多く観察された。

まとめ

名和中畝遺跡出土土器の胎土分析(蛍光X線分析法・砂粒観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内で時期ごとに胎土に違いがあるかどうかでは、弥生時代終末期の土器が蛍光X線分析で3つに分類できたが、実体顕微鏡による砂粒観察では差はみられなかった。古墳時代後期では14が他の土器に比べ、角閃石の砂粒が多くみられ、識別できた。また、弥生時代終末期と古墳時代後期の砂粒観察では、弥生のほうが、石英などの砂粒が少ない傾向にあった。そして、須恵器では1つにまとめり同じ産地からもたらされた可能性がある。

以上のように、古墳時代後期の名和飛田遺跡との比較では、器種・質により分布域がほぼ似ていた。データ試料を蓄積し追認する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

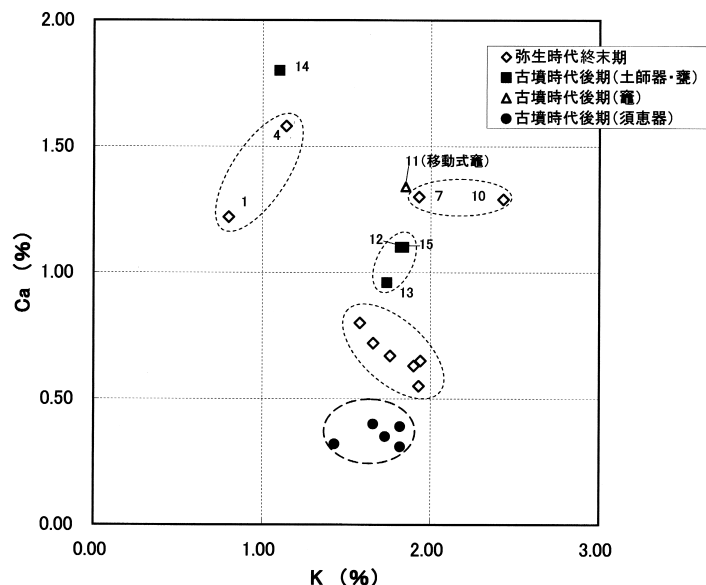


図43 遺跡内での時期別の胎土比較(K-Ca)

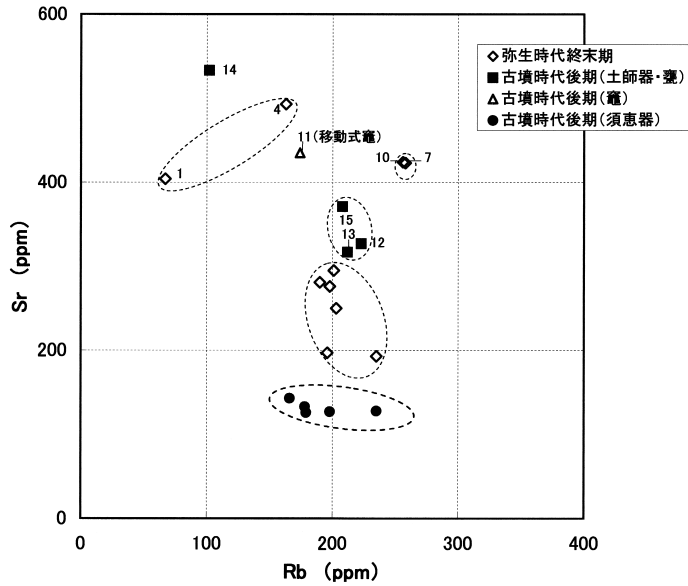


図44 遺跡内での時期別の胎土比較(Rb-Sr)

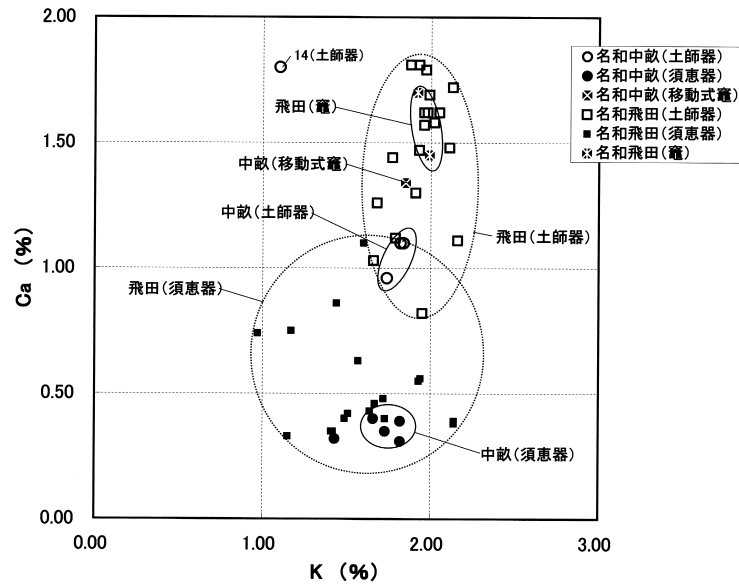


図45 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(K-Ca)

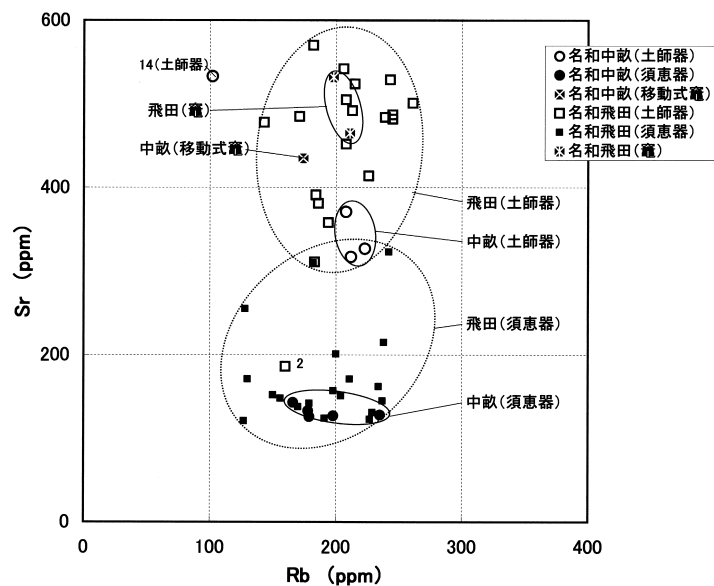


図46 古墳後期土器の器種・焼成別胎土の比較(Rb-Sr)

2. 名和中畝遺跡出土炭化材の樹種同定

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名和中畝遺跡は、大山北麓に位置し、縄文時代～古墳時代の遺構が検出されている。このうち、弥生時代終末期の竪穴住居3からは住居構築材の可能性がある炭化材が出土している。

本報告では、木材利用状況についての情報を得るため、出土炭化材の樹種同定を実施する。

試料

試料は、竪穴住居3から出土した炭化材10点である。

分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

結果

樹種同定結果を右表に示す。炭化材は、広葉樹4種類（クリ・スダジイ・ヤマグワ・クスノキ科）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

樹種同定結果

遺構	年代	番号	樹種
竪穴 住居3	弥生時代終末期	1	スダジイ
		2	スダジイ
		3	クリ
		4	スダジイ
		5	スダジイ
		6	ヤマグワ
		7	スダジイ
		8	クスノキ科
		9	クスノキ科
		10	スダジイ

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2-3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は基本的に単穿孔であるが、小道管に階段穿孔が認められることがある。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

考 察

樹種同定を行った炭化材は、全て弥生時代終末期の竪穴住居3から出土したものである。合計4種類の木材が確認され、スダジイが6点で最も多く、他の3種類は1、2点であった。この結果から、スダジイを中心に少なくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。

確認された種類のうち、クスノキ科を除く3種類は、重硬で強度が高く、クリやヤマグワは比較的耐朽性も高い。クスノキ科は、大径木になる種類から低木まで多くの種類があり、材質も比較的重硬なものからやや軽軟なものまで幅広い。これらの結果から、基本的には硬く強度の高い木材を選択していることが推定される。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種となる常緑高木である。一方、クリやヤマグワは、二次林等の落葉広葉樹林中に生育する落葉高木である。クスノキ科は、常緑性の種類が多いが、落葉性の種類も含まれており、科としての生育範囲は広い。

本遺跡周辺では、押平尾無遺跡で弥生時代終末期、古墳時代前期前葉とされる3軒の竪穴住居跡から出土した炭化材について樹種同定が実施されており、コナラ属アカガシ亜属、クリ、スダジイ、ヤマグワ、クスノキ科、イネ科が確認されている⁽¹⁾。コナラ属アカガシ亜属とイネ科を除く4種類は、今回の樹種同定結果でも認められた種類である。コナラ属アカガシ亜属は、クリやスダジイ等と同様に重硬で強度の高い材質を有する。一方、イネ科は材質を考慮すれば、屋根材等の萱材として利用された可能性がある。今回の結果は、押平尾無遺跡の結果とも調和的である。また、古御堂新林遺跡の弥生時代終末期の住居構築材と考えられる炭化材でもクリ、スダジイ、クスノキ科が認められており⁽²⁾、今回の結果と類似する結果が得られている。これらの結果から、本地域では弥生時代末から古墳時代前期初頭頃の住居構築材にクリ、スダジイ、クスノキ科などが多く利用されていた可能性がある。こうした木材は、周辺から入手していたと考えられ、遺跡周辺に常緑広葉樹のスダジイや落葉広葉樹のクリ、ヤマグワ等が生育していたことが推定される。

今回の樹種同定では少なくとも4種類が利用されていることが明らかとなった。しかし、同定点数は、1軒の住居構築材の総数に比較すれば少ない。また、硬い木材は燃焼の際に燃え残り易いことが推定される。実際に弥生時代終末期の6軒の住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施した倉吉市下張坪遺跡では、合計12種類の木材が確認されている⁽³⁾。そのため、本地域においても確認された他にも木材が利用されていた可能性があり、今後の資料蓄積が課題である。

註

(1) パリノ・サーヴェイ株式会社 2003「古御堂笹尾山遺跡・茶畑第1遺跡・押平尾無遺跡における出土炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書93 茶畑遺跡群第3分冊 古御堂笹尾山遺跡 古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団 3-187~3-191.

(2) 前掲(1)文献

(3) パリノ・サーヴェイ株式会社 1997「下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種」『倉吉市文化財調査報告書第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 113-123.

第5章 まとめ

1. 調査のまとめ

この度の調査では、前述の通り縄文時代から古墳時代に至るまでの遺構や遺物を確認した。時期毎に留意点をいくつか述べ、まとめとしたい。

縄文時代

早期～中期に比定される土器片、黒曜石製を中心とした石器類を検出した。埋土から遺物の出土した土坑1・2・3を除いて、明確に当該期とする遺構は無いが、土坑4～7は形態から落とし穴の可能性が高い。落とし穴は縄文期の遺構として、大山北麓丘陵上に立地する近隣の遺跡からも数多く報告されている。また、多数確認された石器類の出土状況は、本遺跡周辺で石器製作が行われていたことを示している。今後は関連遺構の確認が課題といえよう。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は竪穴住居1～3である。いずれも弥生時代終末期に属し、当地域では一般的な住居といえよう。竪穴住居3の北東隅で確認した集石(図24)の石材は角閃石黒雲母安山岩である。きめが粗く、竪穴住居1ピット13埋土中出土資料(根石)や敲石等に同材を使用している。簡便な礫石器用石材として利用されていたことが窺える。

竪穴住居1から南東へ約48m離れて竪穴住居2・3が分布するが、両住居間に多数検出されたピット群・掘立柱建物群の帰属が問題となる。掘立柱建物6のピット5・7埋土中からは、弥生時代終末期と思われる土器小片を確認しており当該期に属する可能性があるが、ピット562等からは古墳時代中期～後期と考えられる土器片を散見している。埋土の色調は大きく4種類確認したが、出土遺物との対応関係が掴めず、時期を明確にできなかった。

古墳時代の遺構として確実なのは、竪穴住居4のみである。先述のように、本住居からは移動式竈

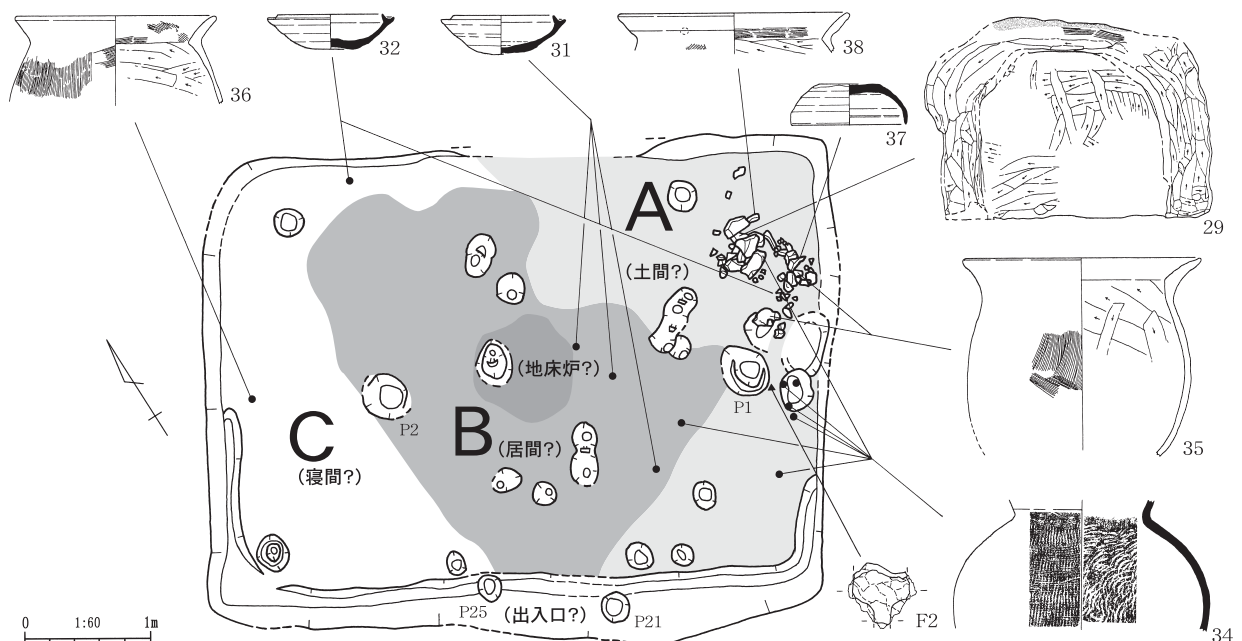


図47 竪穴住居4間取り想定図

が使用位置を留めた状況で出土した。また、床面の遺存状況が概ね良好で、須恵器や土師器等の遺物も比較的まとまった量が検出されている。本項では、これらを材料として本住居内の間取りについて一考してみたい。まず、床面を形成する土質の相違により、A・B・Cと3つの範囲に分類した(図47)。Aは貼床(図26中⑧層)の施された範囲で、表面が固く締まる。住居内北東～東部分を占め、北東部隅に竈が位置する。32は攪乱のため若干動いていると思われるが、竈周辺には土師器甕、須恵器甕・坏蓋・坏身が置かれていたのであろう。床面検出遺物のほとんどがこの範囲に収まる。Bは平均で深さ10cm程掘り込まれ、図26⑨層が充填される範囲である。Aエリアのようなしまりは無い。住居内の中央部を占め、地床炉と思われる焼土の広がりを中心に位置する。Cは住居内西側の範囲で、基盤層であるVI層上面を直接床面としている。BとCの土質は近似しており、掘り込みの意図については判然としないが⁽¹⁾、両者を区別する意識は存在したと推測する。また、Bは住居南東壁の際まで広がり、その近くには浅いピット21・25が間隔1m程で並ぶ。梯子穴の可能性があり、入り口と想定する⁽²⁾。以上から各範囲の空間利用状況について推察すると、Aは竈を中心とした厨房、物置等のいわゆる土間、Bは炉を中心とした居間的な場所⁽³⁾、残るCは寝間となろうか。古墳時代における竈の導入により、竪穴住居の空間構造の中心が縄文時代以来の炉から竈に移行し、大きく変容することが指摘されている⁽⁴⁾。動産的な移動式竈の使用位置を推定できる例は少ないが⁽⁵⁾、類例の蓄積により当該期住居内の空間利用の実態に迫れるものと思われる。今後の課題としたい。

(加藤)

2. 移動式竈について

古墳時代中期(5世紀代)の竪穴住居には竈が造り付けられるようになり、炊飯形態に変化が生じる。こうした不動産的な竈に加えて、持ち運び可能な竈形土製品(移動式竈)が出現する。古墳時代後期(6世紀)には、畿内を中心に西日本で多数出土し、東日本でも関東を中心に出土例が増加している⁽⁶⁾。山陰地域は造り付け竈の検出例が少ない一方、移動式竈が出土する地域として知られる⁽⁷⁾。本節では従前の研究成果をふまえつつ、鳥取・島根両県の移動式竈について概観してみたい。

時期や形態がある程度明らかな代表例に限定し、地域、時期別に並べた(図49)。山陰地域における移動式竈の初現は、須恵器陶邑編年⁽⁸⁾TK208、TK23型式併行期頃に求められる。鳥取県園第6遺跡では、時期は下るが(陶邑MT85併行期)、畿内の初期須恵器共伴例に形態が類似した竈(図49中7)が出土しており、朝鮮半島系遺物の可能性が指摘されている⁽⁹⁾。6世紀後半になると出土量は増加し、出雲6B期(陶邑TK48併行)以降、徐々に出土量を減らしながら8世紀前半頃まで一定数みられる。その後両地域とも8世紀後半～9世紀代の資料を散見するが、その頃に収束していくものと思われる。

分布状況であるが、鳥取県は因幡・伯耆の両地域で出土している。ただ、山間地域の様相については調査例が少なく詳細は不明であり、今後の調査を待ちたい。

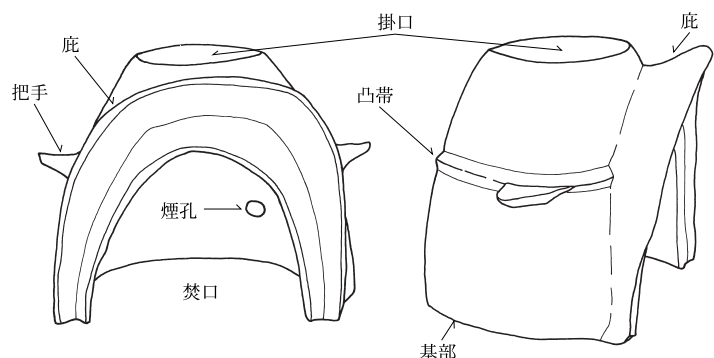
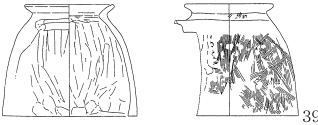
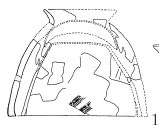
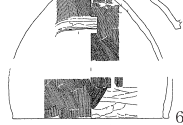
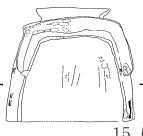

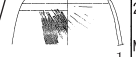






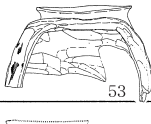
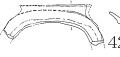


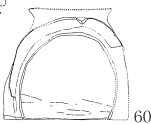


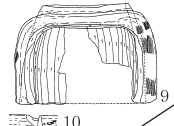
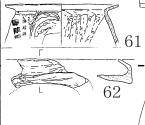



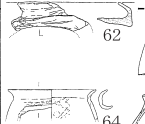


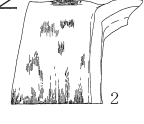

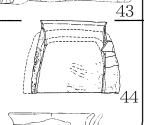
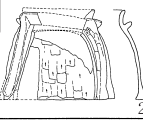
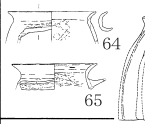
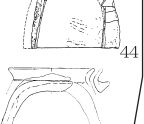
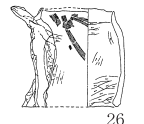
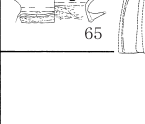

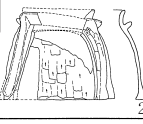
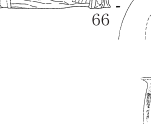
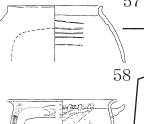
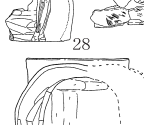
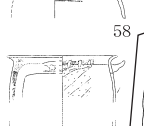
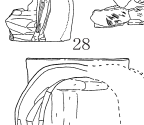


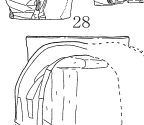
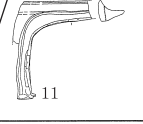

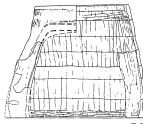
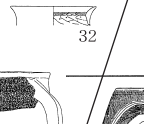
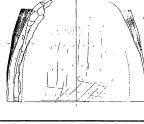

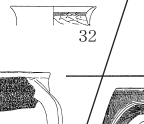
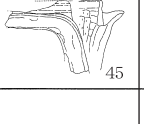
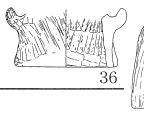
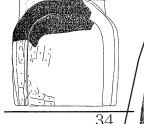
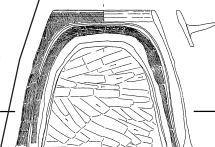
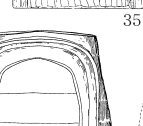
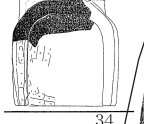
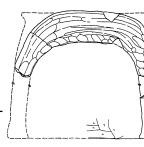

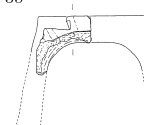
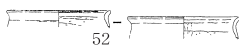

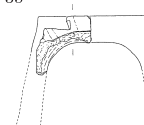



図48 移動式竈部位名称(近澤1992をもとに作図)

島根県	鳥取県			時期 出雲 大塚1994 畿内 中野1981
	西伯耆	東伯耆	因幡	
				出雲1 TK47 以前
				出雲 2(A) MT15
				出雲 2(A) 2(B)
				TK10 出雲 2(B) 2(C) MT85
				出雲3 TK43
				
				出雲4 TK209
				
				出雲5 TK217
				
				
				
				出雲 6(A) TK46
				
				出雲 6(B) TK48
				
				
				出雲7 MT21
				
				出雲8 MT21
				9世紀 以降

(※縮尺:24分の1)

図49 山陰地方の移動式竈変遷図

島根県では安来市、松江市とその周辺（東出雲町、玉湯町、宍道町）、西部出雲地域（出雲市、斐川町）、出雲南部地域の一部（木次町）、石見中部の海岸部（江津市）に出土例がある。石見・出雲の山間部は造り付け竈が設けられ、移動式竈の出土が無い地域である。中国山地を隔てた広島県北部の影響との指摘がある⁽¹⁰⁾。

出土する遺構は、①竪穴住居・テラス状遺構・掘立柱建物及びその周辺、②旧河道・大溝等、③古墳副葬品がある⁽¹¹⁾。山陰地域では一部古墳の周溝等からの出土があるが、ほとんどが①・②に該当し、①が多数を占める。先述したように山陰では造り付け竈を採用する地域に限られるため、炊飯具としての活発な使用が想定されるが、検出された住居の総数のうち移動式竈が出土した住居の数は、甕や甑形土器に比べかなり少ない⁽¹²⁾。加えて、他地域では竪穴住居内で造り付け竈と共伴する例がみられることや、正倉院文書、延喜式等の史料記載より非日常的な祭事での使用を強調する説があり⁽¹³⁾、現状では竈の明確な性格付けは困難である。島根県域、伯耆地域では土製支脚との共伴例が多数みられる。竈と土製支脚は甕や甑等を支持するという使用方法や用途が重複すると思われるが、サイズのセットでの使用は難しい。ハレとケの調理においてこれらを使い分ける可能性も指摘されている⁽¹⁴⁾。

移動式竈は、基本的に図48の部位からなる。底部の仕様により「付け庇」と「曲げ庇」の2系統が知られているが⁽¹⁵⁾、山陰地域では付け庇系のみがみられ、煙孔は確認されていない。掛口端部の形状に特徴があり、土師器甕口縁部に類似した断面「くの字」状を呈するものがみられる⁽¹⁶⁾。以下、掛口端部の形状に着目し3タイプに分類する。

A類：掛口の立ち上がりが内傾または直立する。（図49中2、8、12等）

B類：掛口が外方に屈曲し、くの字状を呈する。（図49中14、23、39、61等）

C類：掛口が外反しながら立ち上がり、如意状を呈する。（図49中25、56、66等）

形態的な変遷は、体部形状の漸移的な変化が認められる。導入期（出雲1期、陶邑TK47併行期前後）から陶邑TK217併行期頃までは体部が丸みを帯びるもの（39、9、25等）が多いが、以後体部が直線的な例（30、37等）が主体となる傾向が確認できる。掛口形態については、各地域に点的な例外はあるが島根県内は先の分類のB・C類、鳥取県内では因幡・東伯耆がA類、西伯耆はA・B・C類全てを確認できる。西伯耆は、島根県と鳥取県東部（因幡・東伯耆）との折衷的な様相を示している点は興味深い⁽¹⁷⁾。時期的な変遷は完存する資料が少ないため詳細な検討ができないが、大枠を述べたい。

導入期は西伯耆～島根県内ではB類、東伯耆、因幡ではA類が出土する。その後、島根県内ではB類が出雲3期以後C類と併存し、出雲4～5期頃に減少し、以降はC類が主体となる。因幡・東伯耆では点的な例外を除きA類が卓越する。TK23併行の倉吉市夏谷遺跡出土竈（6）は掛口の内傾度が強く、小さな庇が焚き口上部に付き以後の例とやや一線を画するが、良好な後出資料が無く詳細な変遷過程を現状では辿れない。7世紀後半～8世紀前半期の資料は器壁が薄い造りのものが増加し、厚み6、7mm程の例もみられる。西伯耆の出現期は島根県内と同様B類がみられる。古墳時代中期後葉に比定される米子市研石山遺跡例（14）の庇は焚口上面にのみ付く。やや時期が開くが、陶邑MT15～TK10併行の米子市長砂第3遺跡資料（15）は焚口側部の中位程まで庇が付く。以降の資料では庇が基部まで巡り、変遷が窺える。ただ、この庇の変化が当地域で普遍的なものか、他地域でも見られるかどうかは資料が少なく現時点では判断できない⁽¹⁸⁾。MT85併行期には、B類に加えてA・C類が出土する。体部に突帯が巡り、把手が付くものが含まれ、米子市、西伯郡会見町で主に出土している。突帯や把手は畿内、山陽地域で見られる属性であり、TK217併行期頃まで散見される。安来市山ノ神

遺跡出土例（40）の体部には突帯が巡り同様な特徴を有し、鳥取－島根県境付近に本タイプは主に分布すると思われる。TK217～TK48併行期以降はB・C類が減少し、A類が主体となる。導入期から6世紀代頃の折衷的な様相から、古墳時代終末期以降は東伯耆～因幡地域のAタイプへと変遷することが窺える。

山陰地域の移動式竈 地域別分類変遷表

時 期	島 根 県			鳥 取 県								
				西 伯 耆			東 伯 耆			因 幡		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類	A類	B類	C類
TK47以前	39					14			6			
MT15												1
TK10				16	15							
MT85				17								
TK43		46										
TK209	67	41		20	23	21	8					
TK217	61	58		24	23	25	9					2
TK46	64	65	66	26								
TK48				28								
				30								
MT21		59		33	32		11					3
				35								4
				37								
9世紀以降		51		38								5
		52										

表中番号は図49中と対応

山陰地域出土の移動式竈について形態的特徴を中心に概観してきた。破片資料が多く詳細な検討にはほど遠いが、近年出土例が増加しており、更なる検討が可能になると思われる。また、6世紀後半の出土数増加は竈の普及拡大を示すと思われ、土製支脚の出現期とも重なることから炊飯形態変化の画期と捉えられている⁽¹⁹⁾。安来平野～松江周辺では、出雲4～5期に集落構成主体が竪穴住居から掘立柱建物へと変化し、炊飯形態の画期とほぼ連動することが分かってきており⁽²⁰⁾、興味深い。今後このような視点から各地域の検討が進めば、移動式竈についても新たな知見が得られると考える。

(加藤)

註

- (1) 福岡県甘木市宮原遺跡等の古墳時代中期～奈良期の竪穴住居では、貼床下に一段深く掘り込まれる範囲が存在する。ただ、住居中央部分ではなく、周壁との間に認められるもので本例とは異なる。
福岡県教育委員会 1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－46－ 宮原遺跡Ⅲ（AⅡ・D地区）』等
- (2) 都出比呂志 1989「竪穴式住居の立体構造」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- (3) 浅川滋男 2001「竪穴住居の空間分節」『竪穴住居の空間分節に関する復元研究』奈良国立文化財研究所
床面の硬軟から住居内利用状況を考える研究がいくつか為されており、出入口～住居中央に位置する炉の周囲が固く、壁際が柔らかい傾向を示している。一方、炉の周辺が柔らかい例として、板敷きによる揚床の痕跡を残す住居（縄文時代）が紹介されている。本遺跡例ではそうした痕跡は確認されていないが、可能性として注目される。
- (4) 前掲（3）文献
- (5) 例えば、鳥取県福成早里遺跡のテラス状遺構（SS33）では直径40cm、深さ5cm程度の被熱範囲があり、竈を据えた場所の可能性が指摘されている。島根県渋山池遺跡では掘立柱建物（SB-08）等において径40～50cm、厚み約3cmの被熱した粘土貼りがあり、竈床と推定されている。同遺跡では竈が多量に出土しており、注目される。ただ、両例とも竈が被熱範囲に接して出土したわけではない。
- (6) 財団法人大阪府文化財センター、日本民家集落博物館 2004『カルチュアはっとりNo.3 シリーズ ここまで分かった考古学 竈形土器の語るもの』日本民家集落博物館企画展示資料
- (7) 杉井 健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
なお、本節において「山陰地域」とは島根・鳥取両県のことを示し、長門・但馬地域は含めていない。
- (8) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- (9) 鳥取県教育文化財団 1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』
- (10) 岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター

- (11) 近澤豊明 1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版
- (12) 移動式竈の出土数が増加する6世紀後半～7世紀前半頃の資料からいくつか例を示す。鳥取県八橋第8・9遺跡で竪穴住居総数23棟のうち7棟、鳥取県上種第6遺跡で全17棟のうち4棟、鳥取県百塚第5遺跡で全17棟のうち1棟である。
- (13) 稲田孝司 1978「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会
- (14) 前掲(10)文献 因幡地域は土製支脚出土が希薄な地域で、秋里遺跡や桂見遺跡等で散見される程度である。
- (15) 前掲(13)文献 「付け庇」は焚口周縁及び周辺に粘土を貼付け庇とし、「曲げ庇」は焚口の切り口上部を前方に折り曲げ庇とするものである。
- (16) 前掲(11)文献 この形態の竈は山陰、北陸を中心とした日本海側に分布の中心があるようである。
- (17) 前掲(10)文献 本稿分類のA類が東部型、B・C類が西部型に該当する。
- (18) 石見中部の江津市半田浜西遺跡例(図49中67)でも庇が焚口上部に付く例(B類)が報告されているが、6世紀後半と時期が下る。当地域周辺においても資料の増加が待たれる。
- (19) 前掲(10)文献
- (20) 鳥根県教育委員会 1997『石田遺跡Ⅲ』

山陰地域の移動式竈 出土遺跡一覧

鳥取県

(*市町村名は2003年現在)

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考
粟谷Ⅱ	福部村	土器溜	不明	-	-		八橋第8・9	東伯町	SI1	TK48	-	-	
新井三嶋谷	岩美町	1号墳丘墓北側斜面	6世紀末～7世紀中葉?	-	A?				SI2	MT85	-	-	
			SI3	MT15	-	-							
久能寺孤塚	郡家町	SI-5	古墳中期?	-	-				SI6	TK43	-	-	
			SI9	TK209	-	-							
余井唐堀	用瀬町	第1トレンチ	古墳後期後半～飛鳥Ⅱ期	-	-				SI13	TK43	-	-	
			SD02	古墳後期後半～中世	-	-				SI14	TK10～MT85	-	-
秋里(西峯竹)	鳥取市	SK66	TK209～217	2	A				南谷部第Ⅰ層	6～8世紀	-	-	
秋里Ⅳ	鳥取市	土器群1	8世紀前半?	4	C				南谷部第Ⅱ層	6～8世紀	-	-	
秋里	鳥取市	BⅠ区遺構外	不明	-	-				南谷部第Ⅲ層	6～8世紀	-	-	
			不明	-	-		南谷部土器集中ブロック	7世紀後半中心	-	-			
岩吉Ⅳ	鳥取市	SX-01	奈良後半～平安中葉	5	A		小倉山	関金町	SB03	古墳後期中葉～後葉	-	-	
		遺構外	不明	-	A		野口 B地区	倉吉市	1号住居址	6世紀後半	-	-	
西大路土居	鳥取市	SI19・20	TK47～MT15	1	A	竈掛部?	中電八橋線鉄塔建設予定地内	倉吉市	4号住居址	6世紀後半	-	-	
		遺構外	不明	-	-				No.32地区	2号住居址	7世紀後半	-	-
山ヶ鼻	鳥取市	自然河道	不明	-	-		大山	倉吉市	D地区2号墳丘周溝中	6世紀後半	-	-	
古市Ⅰ	鳥取市	SK-08	8世紀前半?	-	-				27号住居	TK23	6	A	
		SK-09	8世紀前半?	-	-				夏谷	倉吉市	1号大壁住居状遺構	不明	-
古市Ⅱ	鳥取市	SK-12	8世紀前半?	-	-		SD-B01	遺構外			7世紀後半～平安時代	-	A?
		SD-B01	7世紀後半?	3	-				クズマ	倉吉市	1号墳周溝上層	7世紀後半～8世紀前半	11
桂見八ッ割地区・桂見堤谷東地区	鳥取市	SD10	奈良～平安時代	-	-		福田寺	倉吉市	2号溝状遺構	8世紀前半以降	-	A	
		SB10	奈良～平安時代	-	A?				2号土坑	8世紀前半	12	A	
本高門ノ前	鳥取市	遺構外	不明	-	-		立道東古墳群	倉吉市	2・3号墳表土、周溝内	不明	-	-	
寺戸第1	泊村	土器溜02	不明	-	-				周溝内土坑	6世紀前半	-	A	突帯
小浜小谷	泊村	SS01・SI01	7世紀後半以降	-	-		東高田	名和町	遺構外	不明	-	-	
園第6	泊村	ヒット群1	MT15	7	-	朝鮮半島系?	茶畑第1	名和町	竪穴住居18	古墳後期中葉	-	-	
長瀬高浜Ⅱ	羽合町	遺構外	不明	-	-		古御堂笹尾山	名和町	竪穴住居15	古墳後期後葉	-	-	
長瀬高浜Ⅵ	羽合町	11BSK01	TK209	9	A				竪穴住居24	TK47?	-	-	
上種第5	大栄町	竪穴住居跡9号	TK43～209	8	A		名和衣笠谷	名和町	Ⅱ層	8世紀中葉～9世紀前半	38	A	
			MT15～TK10	-	-				竪穴5	古墳後期	18	B/C	突帯
上種第6	大栄町	竪穴住居跡12号	TK209?	-	-		名和飛田	名和町	竪穴2	TK209	23	B	
			TK209～217?	-	-				竪穴住居3	TK209	-	-	
			TK209	10	A				竪穴住居4	TK217	26	A	
			TK209	-	-				SI05	6世紀前半?	-	-	
曲第1(曲岡)	北条町	SS-02	7世紀中葉?	-	A		仁王堂(平第2)	大山町	A区遺構外	不明	-	-	
			不明	-	-				谷部遺物	不明	-	-	
曲宮ノ前	北条町	遺構外	不明	-	-		大下畑	淀江町	谷部遺物	不明	-	-	
中浜	北条町	包含層	不明	-	-		百塚Ⅲ	淀江町	3号住居跡	古墳後期?	-	-	
三保	東伯町	5区Ⅱ層	不明	-	A		百塚第5	淀江町	SI01	TK209	24	A	把手
笠見第3	東伯町	3号墳墳丘	TK209～217	-	A?		百塚Ⅶ	淀江町	7号住居跡	TK209	22	A	
複谷	東伯町	S14	MT15	-	-		妻木晩田	淀江町	MGSI-73	TK217～TK46	-	A	
松谷中峰	東伯町	B区遺構外	古墳中期後葉	-	-				MGSI-74	TK217～TK46	28	A	
井園地頭	東伯町	表土・攪乱土	不明	-	-		福岡谷ノ上	淀江町	SI-05	TK48	32	C	

第5章 まとめ

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	
福岡谷ノ上	淀江町	A区遺構外	不明	—	A		陰田第6(市)	米子市	C6・C7・D7 7世紀上層	TK217以降混在	—	A		
福岡柳谷	淀江町	A区土器溜	MT85～平城京IV	—	A					C6・C7・D7 奈良期堆積	TK217～ MT21混在	—	C?	
小町石橋ノ上	岸本町	SD11	不明	—	—		陰田 マノカンヤマ	米子市	遺構外	不明	—	—		
宮尾	会見町	SI02	6世紀後半	19・20	A	突帯・把 手	陰田小犬田	米子市	遺構外	不明	—	A	羽釜?	
天王原	会見町	F区SI-02	6世紀中葉	17	A	突帯	陰田荒神谷	米子市	SS-02	TK217～TK46	—	—		
天萬土井前	会見町	SD20	6世紀中葉以降	21	C	突帯			SS-02 SB-7	TK46	—	—		
福成早里	西伯町	SI3	TK217	—	—				SS-02 SI-3	TK217～TK48	—	—		
		SS19	TK209	—	—				SS-4	MT21?	—	—		
		SS18	7世紀後半?	—	—		SS-6	不明	—	—				
		SI6 埋土上層	TK217以降	—	—		陰田広畑	米子市	2テラス	6世紀末～8 世紀後葉(主体は 6世紀末～7世 紀初頭)	—	C/A	8個体分	
		SS21・22	TK217	—	—				3テラス	6世紀末～8 世紀後葉	—	C/A	7個体分	
		SS29・30	TK209	—	—				6テラス	6世紀末～8 世紀後葉(主体は 8世紀中葉～後 葉)	—	—		
		SS31	TK217～TK46	—	—				遺構外	不明	—	—		
古谷銭神I	米子市	遺構外	不明	—	C?			6テラス	6世紀末～8 世紀後葉(主体は 8世紀中葉～後 葉)	—	—			
今在家下井ノ上	米子市	遺構外	不明	—	C			6テラス	6世紀末～8 世紀後葉(主体は 8世紀中葉～後 葉)	—	—			
古市カハラケ田	米子市	SD40	古墳後期～奈良 期	—	B/C			遺構外	不明	—	—			
古市宮ノ谷山	米子市	テラス15 集石1	8世紀前半?	34	A/C		陰田隠れが谷	米子市	6テラス	不明	—	—		
長砂第3	米子市	SI08	MT15～TK10	15	B		研石山	米子市	1区SS04	古墳後期～末期	25	C	突帯	
石州府第4	米子市	遺構外	7世紀中葉～後 葉	29・ 30・31	A	把手、ミ ニチュア 土器出土	5区SB06・07	古墳中期後葉	13・14	B				
							8 E-1古代流路	不明	—	B/C				
陰田第6(県)	米子市	SI-11	TK209～TK217	—	—		青木I	米子市	FSI05	TK10	16	A		
		SS-2	TK209～TK217	—	—		青木II	米子市	FSI26	MT21?	37	A		
		SS-4	TK209～TK217	—	—		青木III	米子市	CSX01	MT15以降?	—	—		
		SS-8	TK217～TK46	—	—				ESI02	TK48?	—	—		
SS-22	MT21	—	—		ESI06	TK48～MT21	33	A						
陰田第6(市)	米子市	テラス状遺構3	TK217～TK46	27	A/C		ESS01	MT21?	35	A				
		C6・C7・D7 7世紀中層	TK217 TK46以 降 混在	—	—		ESS02	奈良期	—	—				
							JSS01	奈良期	36	—	—	把手		

島根県

(※市町村名は2003年現在)

遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考	遺跡名	所在地	検出遺構	時期	番号	分類	備考
石田	安来市	I-3区土器溜	出雲4期	—	B/C		福富I	松江市	6区SB05	出雲6B期?	—	—	
石田Ⅲ	安来市	I-S区SR01	出雲4期	42	C		田中谷	松江市	旧河道1土器溜	6世紀後半～ 末頃	53	B/C	
高広	安来市	SX-01下層	出雲4～5期	44	C				加工段1	出雲6B期	59	C	
山ノ神	安来市	建物3	出雲3期	—	—		加工段4	出雲6期?	—	—			
		建物7	6世紀中葉	40	A/C		土器溜まり	不明	—	C			
五反田	安来市	建物6	7世紀末	45	A		久米	松江市	SI-01	出雲5～6期	57	C	
		建物11	TK217	—	C	造付け竈	久米B	松江市	SI-01	出雲5～6期	57	C	
徳見津	安来市	溝状遺構1	出雲4期	43	B/C		米坂	松江市	西区SD-3	不明	—	—	
上野II	安来市	II区包含層	出雲3期?	41	C		イガラビ	松江市	堆積層	不明	—	—	
春日シヌン谷	東出雲町	遺構外	不明	—	—		池ノ奥A	松江市	包含層	不明	—	—	
渋山池	東出雲町	第4号テラス	出雲3期	46	C		矢田平所	松江市	加工段下埋土	6世紀末～ 8世紀?	—	—	
		SB-17	出雲6A期	48	B/C		島田池	松江市	8区SB03	不明	—	—	
		SB-22	不明	—	—		梨子谷	松江市	遺構外	古墳後期～ 奈良期?	—	—	
		加工段9	出雲6B期	50	B/C		石田	松江市	遺構外	不明	—	—	
		土器溜2	出雲5期?	47	B/C		西I	斐川町	段状遺構1	出雲4期?	—	—	
		土器溜3	8世紀以降	—	—		段状遺構2	出雲4～5期?	60	B			
渋山池古墳群	東出雲町	土器溜4	出雲6B期?	49	B/C		三田谷I	出雲市	SI16	出雲1期	39	B	
土器溜5	出雲6B期	—	—		I区SD03	出雲2期?	—	—					
林廻り	東出雲町	土器溜5	出雲6B期	—	—		II区SD01	出雲2期?	—	—			
勝負	東出雲町	SB01	古墳後期以降	—	—		壹丁田	出雲市	土器群1	6世紀後半～ 8世紀初頭	—	B	
		SB02・03	8世紀後半～ 9世紀	51・52	C		古志本郷I	出雲市	C区 SK23	古墳後期～奈良	—	B	
堂床	玉湯町	加工段下方平坦面	6世紀後半～ 7世紀代	—	C		C区 SD18	古墳後期～奈良	—	B			
		SB05	出雲3期	—	—	暖炉状遺 構	SD01	8世紀以降	—	—			
		SB08・09	出雲3期	—	—		古志本郷II	出雲市	SD39上層	出雲4～5期?	61・62	B	
		SB10	出雲3期	—	—		古志本郷V	出雲市	K区土坑埋土	不明	—	—	
岩屋II	玉湯町	加工段4	8世紀中頃	—	—	古志本郷VI	出雲市	浅柄	出雲市	SD02	7世紀初頭～ 前葉	64・65	B
有ノ木	玉湯町	Ⅶ層	不明	—	—	長廻	出雲市	加工段01	出雲4～5期	63	B/C		
竹ノ崎	宍道町	包含層	不明	—	—	高浜II	出雲市	遺構外	不明	—	—		
堀田ヶ谷	宍道町	客土	不明	—	—	小山	出雲市	遺構外	不明	—	—		
西川津V	松江市	V-4-1砂レキB	7世紀?	—	C	小山第3地点	出雲市	遺構外	不明	—	—		
西川津VI	松江市	Ⅲ区右岸青灰色 砂礫層2	7世紀前半～ 中葉	—	—		下合志	出雲市	G区 SE08	不明	—	—	
		Ⅲ区右岸青灰色 砂礫層3	6世紀末	—	—		垣ノ内	木次町	加工段2 土器溜	6世紀後半～ 7世紀代	66	C	
西川津Ⅷ	松江市	遺構外	7世紀?	—	—		遺構外	不明	—	—			
四ツ廻II	松江市	土器溜りC	出雲4～5期	56	C		半田浜西	江津市	東側土器溜り	6世紀後半	67	B	
福富I	松江市	4A区SB05	出雲4期	55	C		飯田C	江津市	包含層	不明	—	—	
		4B区SB15	出雲5～6A期?	58	C?								